



慶應義塾大学ビジネス・スクール

八甲田山雪中行軍 — 危機管理の意思決定 —

5

日露戦争を二年後に迎えることになる明治 35 年（1902 年）1 月 20 日の早朝、弘前第 31 連隊の 37 名に新聞記者 1 名を加えた計 38 名は、兵装して 10 日間で 224 キロメートルの雪の山道を歩くという行軍演習に出発した。 10

1895 年に日清戦争が終結した後も、ロシアは満州や遼東半島への進出を続けていた。当面、日本軍とロシア軍が衝突する可能性が高いのは満州と思われるが、将来的には日本列島が戦地になる可能性も考えられる。ロシア軍が日本列島に攻撃をかける場合には、艦隊で津軽海峡を封鎖して、青森県または他の東北地方の海岸に上陸する作戦が考えられる。青森県弘前市の陸軍第 8 師団、およびそれに属する弘前第 31 連隊や青森第 5 連隊の主な任務は、そのような脅威に対する本州北端の守りを固めることであつた。 15

ロシア軍が上陸する際は、日本軍の拠点の近くに行くとは思えない。おそらく弘前や青森から離れた太平洋岸の八戸付近、または日本海側の鱒ヶ沢付近であろう。その際には、弘前と青森から敵の上陸地点に向けて、軍隊を移動して迎え撃つことになる。その時の経路は、普通に考えれば海岸線の鉄道および道路になるが、敵の艦隊が砲撃でそれらを破壊する可能性がある。優勢なロシア軍の戦力を考えれば、艦砲射撃を避けて、海岸ではなく山中を行軍しなければならない事態が十分に考えられる。青森から海岸線を通らずに太平洋岸に抜けるためには、八甲田山を越えなければならない。山越えでも夏の行軍ならまだ良い。しかし冬の行軍であれば、どれほど難しい事になるだろうか。しかもロシア軍は、 25

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールの大林厚臣助教授によってクラス討論のために作成された。ケースに記載された行軍の事実認定については、各種文献の間でも一致しない部分が多い。本ケースは、あくまで意思決定の演習のための資料であることを目的としており、記述した内容をもって事実認定を主張するものではない。行軍に関係した人物の名前には、仮名が用いられている。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒 223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1 番 1 号、電話 045-564-2444、e-mail:case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/> へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

30

Copyright© 大林厚臣（2004 年 4 月作成、2008 年 1 月、2010 年 4 月改訂）